

[書評論文]

鈴木亮子・秦かおり・横森大輔（編集）

『話しことばへのアプローチ — 創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』

東京：ひつじ書房，2017. vii + 269p. ISBN: 978-489476818-5.

山口 征 孝  
神戸市外国語大学

## 1. 本書の背景と概観

本書は、「話しことばへのアプローチ」をテーマに、談話機能言語学、認知言語学、そして学際的アプローチからの談話研究（「相互行為言語学」、「社会言語学」、「言語人類学」、「ナラティブ研究」）の7本の論考から構成されている。「はしがき」によると、2011年に第1回話しことばの言語学ワークショップが東京大学で開催されて以来、2017年11月現在で13回を数える研究会の成果の一部が本書となって結実した、とのことである。本書の出発点は「話しことば」は「人間の言語の最も根源的形であり、文法研究の中心として捉えるのが自然である」（p. iii）という前提である。本書は2部構成となっており、第1部の「理論編」に3本、第2部の「実践編」に4本の論文が配置されている。また、簡潔なイントロダクションが第1部と第2部の前に付されている。更に、本書著者及び他2名による「コラム」が後記としてあり、各稿のキーワードの事典的解説となっている。以下に本書各章及びコラムの著者名とタイトルを含めた見取り図を示す。

はじめに（鈴木亮子・秦かおり・横森大輔）（pp. iii-iv）

### 第1部「話しことばの言語学」理論編

イントロダクション（大野剛・鈴木亮子）（p. 3）

大野剛・中山秀俊「文法システム再考：話しことばに基づく文法研究に向けて」（pp. 5-34）

コラム：「事例基盤モデル（Exemplar-based Model）」（中山俊秀）（pp. 35-38）

鈴木亮子「話しことばにみる言語変化」（pp. 39-64）

コラム：「発話の「周辺部」における変化」（東泉裕子）（pp. 65-67）

兼安路子・岩崎勝一「多重文法：「こと」の分析を通して」（pp. 69-99）

コラム：「用法基盤文法（Usage-based Grammar）」（兼安路子・岩崎勝一）（pp.

100-102)

**第2部「話しことばの言語学」実践編**

イントロダクション (片岡邦好・秦かおり) (pp. 105-109)

横森大輔「認識的スタンスの表示と相互行為プラクティス:「やっぱり」が付与された極性質問発話を中心に」(pp. 111-141)

コラム:「会話における認識的スタンス」(遠藤智子) (pp. 142-144)

岡本多香子「語りにおけるインタビューの自称詞使用:なぜ「おれ」は「パパ」になり「わたし」になったのか」(pp. 145-177)

コラム:「インタビュー」(岡本多香子) (pp. 178-180)

片岡邦好「創発的スキーマと相互行為的協奏について:「問い」と「相づち」による構造化を中心に」(pp. 181-211)

コラム:「指標性」(片岡邦好) (pp. 212-215)

秦かおり「「みんな同じがみんないい」を解説する:ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察」(pp. 217-248)

コラム:「スモール・ストーリー」(秦かおり) (pp. 249-252)

本書評では第1部と第2部の接点と乖離を際立たせるため横森と岡本の章を詳述する。以下順番に各章を要約し、本書全体の評価と今後の課題に関し管見を述べる。

**2. 第1部要約**

第1部「理論編」は「言語は変化する」と「文法体系は複数ある」をテーマにした話しことばの文法を考察する論考3本が収められている。まず、大野剛・中山秀俊は、「言語使用が文法構造に影響を与える」という知見から根本的な文法観を見直すための指針及び今後の研究の方向性が示されている(p. 5)。具体例として、従来見逃されてきた「倒置」、「非従属化」、「断片」といった日本語の現象が挙げられており、このような話しことばの規則性を説明するためには、これまでの文法観の前提、特に生得的な言語能力による生成的モデル、を疑ってみる必要があると説く。具体的には、イディオム研究や構文文法、更に定型表現の研究で明らかにされている構造的に比較的固定化された表現は生成規則の体系性では説明ができない、としている。また Hopper に代表される Emergent Grammar では文脈を無視した構造規則、つまり言語使用から独立した自立的文法の存在自体、に大きな疑問符を付けている。そこで、今後の具体的研究課題として「文法に見られるユレやブレ」(p. 27)に目を向けるべきであるとしている。発音上のバリエーションが最も客観性が高く、例えば「～ってうか」とその変異形「～っつか」及び「～ってか」は構造ではなく使用の特性と考えられる(p. 28)。一方、意味用法上の変異は統語形式と客観的に

結びつけるのに工夫が必要であり、今後の課題である。最後に、話しことばは書きことばとは「全く異なった」目的を持つ活動であり、話しことばの録音データが量的にも革命的に拡大した現在、この新しい事実を理論化する新しいモデルが必要である、と結論付けている (p. 31)。

続く鈴木亮子は「言語変化」の表題通り話しことばの変化を扱っているが、特に1990年代以降盛んになっている「歴史語用論」と「談話機能言語学」の2つのアプローチを紹介している。興味深いのは、書きことばしか残っていない歴史語用論研究における話しことばの同定方法に関する記述部分である (pp. 42-46)。鈴木によると「話しことばの書かれた記録」を対象にする、とのことである。つまり「文学作品の中の会話部分、戯曲、裁判記録、手紙、…日記」などは「話しことば性の度合いが高い」タイプのデータである (p. 43)。そのようなデータから通時の変化を遡る事例研究には談話標識 (discourse markers, DM) の研究が代表的であり、会話の命題内容に対し、話し手の主観的態度を表明する機能がDMの特徴である (p. 43)。理論的にはTraugottの「文法化」と「(間)主観化」が歴史語用論の通時的分析に用いられる。例えば、日本語の「ても」、「けど」が従属節の末尾から「でも」、「だけど」として発話の最初に使われるようになった通時の変化を扱った小野寺の研究などが紹介されている (pp. 43-45)。最後に、読者にとって有益だと思われるのは、話しことばの変化にいか「気づくか」のコツが3点にまとめられている部分である (pp. 52-59)。それは、(1) 文字化された資料の限界を認識し、録音・録画に立ち返ることで文字化されていない、音声を含むパラ言語情報や参与構造を含めたデータ分析を心がけること。(2) 既存の分類に当てはまらない「ミスマッチ」の用法へ着目すると同時に、(3) データセットに「頻繁」に現れる言語形式にも注目すべきである、の3点である。この鈴木論考は第2部の横森による「やっぱり」の事例研究と多くの点で共鳴することに注意したい。

第1部最終章で、兼安路子・岩崎勝一は、本書の焦点である「話しことば」だけでなく「書きことば」も重要な言語環境として理論化しなければならないと論じている。事例として「会話」「社説」「講演」のコーパスデータから「こと」の使用を分析している。兼安・岩崎の提唱する「多重文法」とは、人間が言語使用環境から実際の言語使用を通し帰納的に構築する「用法基盤文法」は、個体発生論的には話しことば (Spoken Grammar 1, SG1) であるが、その後、書きことばを習得すると書きことばの文法 (Written Grammar 1, WG1) も個人の文法モデルのレパートリーの一部となるという文法理論である。加えて、用法基盤文法を基に更に一段階捨象化された「抽象文法」が構築されるという考え方である。75ページの図4が多重文法をわかりやすく図式化している。この文法論で特筆すべきは、「理解文法」と「産出文法」の区別と個人により異なる文法を持つことを概念化している点である。原理的には無限に「多重」文法が存在すると思われるが、兼安・岩崎は3種類の「ジャンル文法」を措定し、「会話」、「社説」、「講演」という3種類の文法にお

ける「こと」の使用法から例証している。もっとも重要と思われる特性は、「エコロジック」観点からの文法現象の説明である。つまり、会話が文法を創るという談話機能言語学の立場を超えて、書記言語が文法の形成に果たす重要な役割を認識している。そうすることで、個人ごとに異なる文法の説明も可能となるのである。結論部分では高等教育を受けた個人は会話にも書きことばの文法を混在させて使う可能性に触れ、完全な文法理論には書きことばも考慮に入れなければならない点を談話機能文法理論や認知文法理論に提案している。

### 3. 第2部要約

本書第2部(実践編)は、2012年に栃木県で収録された「出産・育児に関する意識変化」と題された半構造化インタビューから採られた同一データ(約7分)を、社会・文化的側面を重視した話しことばへの4つの談話研究のアプローチから分析するというユニークな試みである(英語に関しては van den Berg et al. 2003 参照)。インタビューが行われたのが東日本大震災で震度6強を記録した栃木県中部であり、参加者も大きな被害に見舞われ、その記憶がまだ冷めやらない時期であったという偶発的条件がデータに大きな影響を与えている。先述したように最初の2稿(横森と岡本)を詳述する。

横森大輔の章は、「相互行為言語学」からのものであり、第2部ではもっとも第1部の理論編に接続しやすい理論言語学的な談話分析である(特に鈴木の「頻度」に注目せよ、というコツが活かされている)。横森は「やっぱり」の先行研究の知見として「話し手の態度」に関し、「当該の命題が、先行文脈・既知知識・一般常識などの前提と照らし合わせて整合的な、妥当な結論」(p. 115)を表すものとしている。そこで、この章のリサーチ・クエスチョンは、「相互行為の中で、なぜ話し手はわざわざそのような態度を表示するのか」(p. 115、強調は原文ママ)である。この問いに答えるために、「やっぱり」を話し手の相互行為での立ち位置を示すための「認識的スタンスの標識」と概念化し、データを検証している。

横森は、まず他の文字化された日本語コーパス(Den and Enomoto 2007)を会話分析の概念である「連鎖環境」(前後関係の文脈)に注目して「やっぱり」の用法をグループ分けし、それに基づき課題となっているインタビューデータにおける「やっぱり」の「プラクティス群」を4種類に分類している。特に、「極性質問を行う際に肯定的回答が見込まれていることを示す」というプラクティスに多くの紙面を割いている。「極性質問」とは Yes-No 疑問文と一般に言われるものである(他の3種類は「ある判断を... 検討を踏まえた結果として位置付ける」、「後続発話の展開に向けて共有しておきたい前提を導入する」、「一般的言明について確認を求める」である)(p. 117)。この「極性質問」と共起する「やっぱり」に関し、断片4つを使い例証しているが、131ページの「応用プラクティス」

の図式化が興味深い。〔1〕 参与者 X による《疑問詞質問》が答えにくい質問である場合、〔2〕 他の参与者から「反応の欠如」としての沈黙などが起こり、〔3〕 参与者 X が《極性質問》を「やっぱり」と共起して用いて、〔4〕 参与者 Y から《回答》を得る、というものである。つまり疑問詞質問に対する沈黙を受け、一般的通念と整合する命題であるという認識のスタンスを「やっぱり」によって示すと同時に答え易い極性質問の形で提示することで、「連鎖の進行を促進するという相互行為のプラクティスのための資源」として「やっぱり」を概念化している (p. 131)。「おわりに」ではインタビューという社会的プラクティスにおける「やっぱり」の役割に言及している (p. 137)。

後述するように、横森とは対照的に、岡本多香子の章は、「コンテキストで生起する社会文化的コミュニケーションの原理」の研究としての社会言語学からのアプローチである (p. 148)。具体的な岡本の関心はインタビューを受ける側（インタビューイ）である妻のチホと夫のブンタ、そして筆者であるインタビュアーの「今・ここ」における相互行為において、夫ブンタが用いた3種類の自称詞である。そこで、日本語では自称詞の使用が有標であるという談話機能言語学の知見を受け、「なぜインタビューイの夫が自称詞を用いたのか」、更に「なぜ自称詞を短時間のうちに3つも変えたのか」、という問いに迫る。

本章では自称詞の先行研究として（非言及指示的）談話語用機能である「話し手の感情を表す機能」や「フレームを設定する機能」に言及している (Ono and Thompson 2003)。しかし、これらの談話機能言語学における知見は同一人物が7分の時系列で「なぜ」自称詞を3度も変化させたのかを説明するのに不十分であることから、マイケル・シルヴァスティンの名詞句階層の理論を援用している (Silverstein 1987; 小山 2008)。名詞句階層理論によれば、名詞句は発話出来事の「今・ここ」からの距離に従い階層化されているのである。つまり、コミュニケーションの中心である「今・ここ」を起点とすると、一人称代名詞から二人称代名詞、発話内照応詞、指示詞、固有名詞、親族名詞、人間名詞、有性名詞を経て具体名詞、抽象名詞の順番で「遠く」という階層化である (p. 149)。本章で検討されている自称詞は、性別と親疎に規制される一人称代名詞「おれ」、「親族名詞」の「パパ」、そして男性が比較的フォーマルな社会的状況で使う一人称代名詞の「わたし」である。

岡本の分析ではまずインタビューの構成を STORY I（夫の震災前後の子育て意識の変化）、STORY II（妻の震災前後の子育て意識の変化）、そして STORY III（子どもたちの変化）というトピックとインタビュー内での参与構造の観点から3つに大別し、更にそれぞれの STORY 内でのサブ・トピック (story 1, 2, 3, etc.) に下位分類することから始めている。分析のポイントは STORY I と III ではブンタが使わなかった自称詞がなぜ STORY II では3度も異なる形で生じたかである（自称詞が使われないのはそれが「無標」であり「不必要」であるとしている）。簡潔な答えは、夫ブンタの「不同意、不理解」という感情を示すために使われている、というものである。つまり、このインタビューと

いう発話出来事では STORY I で発言権が保証されていたブンタが、STORY II ではインタビュアーが妻に対する「震災前後の子育ての意識の変化」を語ってもらう目的から、妻の発言を重視した。従って、夫のブンタが発言する際には「自己の語りの領域」(p. 166)を構築する必要があり、そのような「主導権争い」の道具として自称詞を用いた、というものである。Story II では story 5 で「おれ」を「思わないな」と共起して使い不同意を示し、その後、更に社会的役割語である「パパ」を自称詞として使い「父親目線」の語りをを行い、仕事というトピックで「わたし」という自称詞を使い、自己の語りの領域を再構築しようとした。つまり自称詞の変化の理由は何か、という問いに対しては、「ブンタの相互行為の意図を実行する装置」として発話出来事の変化に合わせ、自己の語り領域獲得に向けて3種類の自称詞を用いたのであると結論付けている (p. 174)。

第2部の3番目の章は片岡邦好の論考であり、恐らく本書ではもっとも高度な分析概念の組み合わせを駆使した談話分析となっている。片岡は、課題である震災体験ナラティブを「詩的」構造と聞き手による相づちに主に注目し分析することで、「往復スキーマ」と名付けられた「家族の生還」に関する認知的文化モデルを発見している。本章のポイントは「今・ここ」に生起する、言語的、身体的、その他の記号論的な兆候 (signs) から参与者に共有された「隠された意味」を読み解くことが、被災後の参与者の意識変化を明らかにする手がかりとなるという点である。主な理論的枠組みは、「言語人類学」であり、特に、ヤコブソン、ハイムズ、シルヴァスティン、フリードリッヒによって展開された「詩的」構造」という概念である。それは日常会話にみられることばや身体動作の反復や平行性の使用によるテキストの構造化の結果できた記号論的パターンと定義できる。又、談話分析の有益な道具として「自己発話」と「自己思考」を区別した2種類の「引用」というメタ語用論的手段に着目している。片岡の論考でもっとも興味深いのは、この「引用」というメタ語用論的装置から「非明示的テキスト」を読み解いた点 (pp. 202-203) である。ここでは、言語人類学の観点から「詩的」構造に隠された「非明示的テキスト」を発見することは、認識人類学や認知言語学で言われる「スクリプト」や「スキーマ」の暗在をも意味する。この洗練された理論的統合から、「出発-帰還」の往復スキーマを、日本語の談話レベルでの基本単位である3回又は5回の反復構造を考慮しつつ、「詩的」構造化の中に見出したのである。更に、「今・ここ」での女性 (インタビュアーと妻) 対男性 (夫) というジェンダー・イデオロギーから生じる対立も同時に炙り出している。

第2部の最後に置かれている章は秦かおりによるナラティブ分析からのアプローチである。この章の大きな狙いは、ナラティブ分析という手法を用いることで「規範意識や社会規範を炙り出す」ことであり、特にジェンダーに関し「イデオロギー論と融合」させること (p. 217) である。主要な発見は、スモール・ストーリーが意見の不一致を調整する「前言の撤回・収束」の機能 (p. 217) があることを示した点である。ここで秦の意味する「ジェンダー・イデオロギー」はフェミニズム理論の批判の対象となっている男性ヘゲモ

ニーという無意識的な社会規範を再生産する言説も含むが、この章では、言語的に明示化された「男は」対「女は」というステレオタイプの発話にみられる参加者の主体的ジェンダー役割の構築に注目している。また、スモール・ストーリーはLabovによって提唱された過去の出来事の再現を行った完全な構造を持つナラティブ分析では漏れてしまうような「現在進行中のできごと、未来や仮定のできごと、ほのめかし、語りの拒否」を含むナラティブを指す（p. 220）。秦は、このような今まで見逃されてきた語り（スモール・ストーリー）を発話者のナラティブでのアイデンティティを明示するために「ポジショニング理論」から分析するという立場を取っている。

具体的分析では、スモール・ストーリーの「入れ子型」構造の明示から始まっている（pp. 224-228）。このような入れ子構造を持つスモール・ストーリーが意見の不一致が起こった際にどのように使われているのかが問題となる。これに対し、秦の答えは、男女の性役割が異なるという「男女イデオロギー」は参加者にとって「一致しなくてもいい、違っていることが当たり前の安全領域」（p. 244）であり、意見の不一致の収束のために積極的に活用される、という逆説的なものである。このようなジェンダー・イデオロギーの活用が、どの程度広く「日本的」なものであるか、つまり一般化の可能性に関しては更なる研究に委ねられている（p. 245）。

#### 4. 評価と今後の課題

第1部の理論編は、主に日本語から例をとりながら、「談話機能言語学」、「認知言語学」、「歴史語用論」、そして「多重文法」に及ぶまで、最新の話しことばの理論言語学の概念や知見を大変わかりやすく、平易なことばで説明しており、研究者や大学院生だけでなく、言語学を専攻する学部生にも理解可能であろう。それに対し、第2部の応用編は、高度な専門用語の使用や内容の専門性から、大学院生以上の読者を対象にした論考が並んでいるように思われる。しかし、片岡・秦の第2部のイントロダクションにある通り、「話しことばの言語学が内包する展開の可能性と懐の広さ」と「多層的な現実への異なる視座を提供すること」（p. 108）に見事に成功していると言えよう。全体的な評価として、機能主義的言語理論と学際的談話分析の手法を用いた話しことばへの多彩なアプローチを集めた優れた編著として、本書は高く評価されるべきである。

このような本書の語用論への貢献を認めつつ、今後の課題を述べる。まず、第1部における大野・中山論考と兼安・岩崎論考には「話しことば」の文法理論における役割の点で齟齬があるように思われる。前者では「話しことば」は「書きことば」とは根本的に異なる言語活動であり（p. 29）、書きことばに抛らない理論化が必要であると説いている。一方、後者は、「多重文法」の立場から書きことばを含めた理論化の必用性を主張している。この一見矛盾した主張をどのように解決するかは今後の課題の一つと言えるだろう。

しかし、本評者にとって最も大きな課題と思えるのは、第1部と第2部の乖離である。特に、第1部での「理論編」の知見は「応用編」では横森以外章では、一部活かされているが（例えば、岡本による Ono and Thompson (2003) などの知見の活用を参照）、その逆の方向性はほとんど見られない。このような乖離を象徴的に示すのが、第2部の横森と他の章の違いである。つまり、横森は「会話分析」の知見を利用した「相互行為言語学」であり、「やっぱり」という「言語形式」の「タイプの」意味の解明を目指している。このような探求では、言語使用のコンテクストを「連鎖環境」(Schegloff 2007) と呼ばれる前後の文脈以外の点で「脱コンテクスト化」し、更に英語を中心にした会話分析と相互行為言語学の概念を「脱文化化」し普遍的なものとして用いている。その結果、岡本・片岡・秦の論考の共通項である「震災後」であるという歴史的コンテクストや、「夫」と「妻」という社会的関係性、そして「家族」という基本的社会組織、更に「ジェンダー・イデオロギー」という社会・文化的フレームは、横森の論考では捨象され不可視化されている。「ことばそれ自体」に的を絞っても「日本語」を文化相対性の観点からは見ないで、例えば、「沈黙」を「反応の欠如」とする「エティック (etic)」な概念から記述している。これに対し、片岡では、日本語に「好まれる型」としての3又は5回の反復構造という「イーミック (emic)」な分析が見られる。

このようなコンテクストの捨象度の違いが良くわかるのは、横森と岡本は共に「なぜ」という問いを立てながら特定の言語形式（「やっぱり」対「自称詞」）を探求しているにもかかわらず、その方向性が大きく異なる点である。横森の「なぜ」は、「相互行為のプラクティス」という「普遍的」行為に向かっている。それに対し、岡本は、「なぜ自称詞を夫は使っているのか、そしてなぜ3種類の自称詞か」という問いに、「今・ここ」での自称詞の生起を「トークン（その場一回限りの使用）」のレベルから分析している。その結果、岡本は多くの点で高度に社会・文化的に「コンテクスト化された」分析となっている点を指摘したい。

以上の考察から言えることは、第1部の理論・概念が単純に「応用編」で用いられているわけではなく、また応用編の知見は理論編の筆者にとっては関心事から外れたものとなっている点である。このような乖離を認識しつつ、本書は「理論編」と「応用編」にいくつかの重要な接点があることも示している。例えば、兼安・岩崎の多重文法の理論化には3種類の「ジャンル」（会話、社説、講演）という「社会的コンテクスト」が導入されている。また、鈴木は「言語変化」の気づきのためにビデオデータを見る際には「参与構造」も考慮に入れるべきである、としている。更に第2部の横森は「会話」ではなく「インタビュー」という社会的プラクティスに適した「やっぱり」の有用性に短く触れている。そこで、今後は、いかに第2部の岡本、片岡、秦によって示された社会・文化的コンテクストを考慮に入れた「実践編」の談話分析と言語以外のコンテクスト要因をほぼ消し去った談話機能言語学、認知言語学、歴史語用論及び相互行為言語学との接点を拡大し、相互



の知見を有益に利用できるかが大きな課題の一つと言えるだろう。その意味で、本書副題の「創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦」は適切なものであり、本書はそのような「新たなる挑戦」に向け「話しことばへのアプローチ」を多面的・多層的に示すことでその第一歩を踏み出した重要な編著であると言えるだろう。

## 参考文献

- Den, Y. and Enomoto, M. 2007. "A Scientific Approach to Conversational Informatics: Description, Analysis, and Modeling of Human Conversation." In T. Nishida (Ed.) *Conversational Informatics: An Engineering Approach* (pp. 307-330). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- 小山亘. 2008. 『記号の系譜』東京：三元社.
- Ono, T. and Thompson, S. 2003. "Japanese (*W*)*atashi/Ore/Boku* 'I': They're Not Just Pronouns." *Cognitive Linguistics* 14(4), 321-347.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, Vol. 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silverstein, M. 1987. "Cognitive Implications of a Referential Hierarchy." In M. Hickman (Ed.) *Social and Functional Approaches to Language and Thought* (pp. 125-164). Orlando, FL: Academic Press.
- Van den Berg, H., Wetherell, M. and Houtkoop-Steenstra, H. 2003. *Analyzing Race Talk: Multidisciplinary Perspectives on the Research Interview*. Cambridge: Cambridge University Press.